

# ジェブツンダムパの「転生」認定と 17世紀のチベット・モンゴル関係

新藤篤史

## はじめに

チベットでは、僧院社会における「転生」制度が公認されている。名僧が亡くなると、その生まれ変わりがダライラマのような高僧によって認定され、亡くなった僧が享受していた特権や財産がその僧の生まれ変わりと認定された子供に引き継がれるのである。

そもそも僧院社会の「転生」とは、仏教における「菩薩の行」の実践であり、対象の僧が涅槃に入らずに、輪廻の世間に留まって有情を救済する境地にいることを示すものといえる。よって、名僧の生まれ変わりと認定された者は、単なる「生まれ変わり」というよりも、いわゆる菩薩の境地にいる僧の「トゥルク (sprul sku = 化身)」と称され、生まれながらにして崇拜される。代表の僧を失った宗派にとっては、次の指導者を宗派の意に適った形で教育できるという利点もあり、またトゥルクを輩出した世俗集団との関係を密にすることもできる。「転生」制度は、宗派とそれにまつわる諸集団との相関関係を知るうえでも重要である。

1589年、モンゴル・トゥメト部<sup>1)</sup>のユンテン・ギャンツォ (1589-1616) がダライラマ4世に認定された。この認定の背景には、1578年に、チベット仏教ゲルク派のソナム・ギャンツォすなわち後のダライラマ3世 (1543-1588) と、トゥメト部の首長でありユンテン・ギャンツォの大伯父でもあったアルタン・ハーン (1507-1581) が、青海のチャプチャールで会見し、両者の「師檀 (mchod yon)」<sup>2)</sup> 関係が成立したことがあげられる。そして、ダライラマという高僧をアルタン・ハーンの一族に見出すという「転生」認

定からは、ゲルク派とトゥメト部の友好関係が確認でき、それと同時にチベット仏教のモンゴル布教が本格化したことが読み取れる。

実際に、16世紀後半以降のチベットとモンゴルの間では、チベット仏教僧とモンゴル王侯の「師檀」関係の成立が顕著であった。チベットでは、モンゴル王侯からの支援を受けた宗派が自ずと勢力を増した。とりわけゲルク派は、ダライラマ5世（1617-1682）<sup>3)</sup>を中心に1642年にチベットの統一政権を担う存在となった。一方、モンゴルでは、チベット仏教はモンゴル王侯にとって権力を確立させる要素でもあり、例えばモンゴルの王権を意味するハーンの称号は、17世紀になるとダライラマから授けられることを定例とした（新藤 2013）。よって、モンゴル王侯は進んでチベット仏教に帰依し、次々とモンゴルにチベット仏教流入の道を開いていった。

こうして築かれた「師檀」関係をもとに、チベットの僧院はモンゴルに多くの末寺を建立し、チベットで名を馳せた僧を送り込んで布教にあたらせた。そして、それらの僧が亡くなると、布教先で僧の生まれ変わりが認定された。ジェブツンダムパ（1635-1723）<sup>4)</sup>は、中でも最も有名で多くのモンゴル人に崇拜されたトゥルクである。1586年にダライラマ3世と「師檀」関係を結んだモンゴル・ハルハ部<sup>5)</sup>のアバタイ・ハーン（1554-1588）の子孫にあたるトシェート・ハーン<sup>6)</sup>の息子でもあった。つまり、ジェブツンダムパは当時のチベットとハルハ部の友好関係を象徴する存在ともいえる。

## 時代背景および先行研究

一般的に、ジェブツンダムパはチベット仏教チヨナン派の僧ターラナータ（1575-1634）の転生者とされている。ゲルク派と「師檀」関係を結んだはずのトシェート・ハーン一族から、なぜ別の宗派のトゥルクが認定されたのか。これは従来、ジェブツンダムパの「転生」認定に関して、様々な解釈をもたらしてきた<sup>7)</sup>。

ターラナータの宗派チヨナン派は、中央チベット西部ツァン地方を拠点にしていた宗派である。そして、チヨナン派の施主であったツァン王がゲルク

派と敵対関係にあったカルマ派の支持者でもあったことから、チョナン派とゲルク派は対立関係にあったともいわれている。ちなみに、ゲルク派は中央チベット東部ウ地方を拠点にした宗派で、1642年のチベット統一とはゲルク派の勢力がツァン地方を支配下に治めたことを意味する。

妙舟『蒙藏佛教史』によれば、チョナン派のターラナータは1614年にハルハ部へ行き、没するまでの20年、トシェート・ハーンの庇護の下で布教活動を行ったとされる。そして没後に、トシェート・ハーンの子に転生した。これが、すなわちジェブツンダムパであるが、「ジェブツンダムパ」とは、ターラナータがハルハ部の王侯から贈られた称号であったともいわれている<sup>8)</sup>。また王森氏は、ターラナータがハルハ部へ行った理由を中央チベットにおけるウ・ツァン両地方の対立構造から説明している。ツァン王が、モンゴルに影響を及ぼしていたゲルク派に対抗して、ターラナータをハルハ部に派遣したとしている（王森1985）。

石濱裕美子氏は、『ダライラマ5世伝』や『パンチェンラマ1世伝』等のチベット語史料から、チベットではジェブツンダムパが「ジャムヤン・トゥルク」と呼ばれていたことを指摘している。「ジャムヤン・トゥルク」とは、「文殊(=ジャムヤン)」の「化身(=トゥルク)」という意味で、いわゆるターラナータの転生者としてのジェブツンダムパ像は、後世において定まったとしている（石濱1995）。

金成修氏は、ジェブツンダムパの「転生」認定が行われた当時の状況を踏まえて、ジェブツンダムパがターラナータの転生者として認められたことを疑問視している。というのは、ターラナータの宗派であるチョナン派は、1650年にゲルク派によって粛清され禁教となったからである。そこで、ジェブツンダムパがチベットで「ジャムヤン・トゥルク」と呼ばれていたのは、ゲルク派デペン寺<sup>9)</sup>の創設者ジャムヤン・チュージェー（1379-1449）の転生者として認定されたからとしている（金成修2003）。

このように、ジェブツンダムパの「転生」認定に関しては不明瞭な点が多く、当時のチベットとハルハ部の関係も様々なとらえ方がされている。たとえ後世に「ターラナータの転生者としてのジェブツンダムパ像」が定着していくにしても、そこに至る過程に、ジェブツンダムパを取り巻く環境の歴史的な

動きが読み取れることをこれらの意見は示唆している。本稿の目的は、こうしたジェブツンダムパの「転生」認定に関する考察を通じて、当時のチベットとハルハ部の関係をより正確にとらえるために、ジェブツンダムパの「転生」の起源を探ることである。

## 1. ターラナータの転生者としてのジェブツンダムパ

ジェブツンダムパがターラナータの転生者とされている根拠は、ジェブツンダムパの最古の伝記といわれているザヤ・パンディタ（1642-1715）が著したチベット語版『ジェブツンダムパ伝』<sup>10)</sup>にある。ザヤ・パンディタはジェブツンダムパの弟子であり、17世紀末頃から行動を共にした僧であった。伝記は、ジェブツンダムパの回想を交えた体裁で1702年の記述をもって終了している。ジェブツンダムパの存命中に、側近によって記されたという点から、ジェブツンダムパに関する最も正確な記述ともいわれている。

伝記によると、ジェブツンダムパは1649年からチベットに留学し、その時にチベット第2の法王ともいわれるパンチェンラマ（1567-1662）<sup>11)</sup>から、ターラナータの転生者として認定された。ジェブツンダムパも、自身がターラナータの転生者であることを自覚していたようであり、その様子は伝記の随所で見受けられる。

〔ジェブツンダムパは〕御年15歳の'gal baという己丑年（1649年）に、ウ・ツァンの地（中央チベット）に赴いた。（中略）

パンチェンラマが、〔私（ジェブツンダムパ）を〕尊者ターラナータの転生者である、とおっしゃった……（『ジェブツンダムパ伝』64a-64b）

※史料中の〔 〕は補足。（ ）は前の語の説明。

### 四

ターラナータは、チベット仏教チヨナン派<sup>12)</sup>の僧で、『インド仏教史』の著者としても当時から名が知られていた。ただ、チベット史においては、ダライラマ5世が敵視した僧としても認識され、そのことは『ジェブツンダ

ムパ伝』にも記されている(74b3-4)。実際に、チョナン派は1650年にゲルク派政権によって肅清され、ターラナータの寺院タクテン・プンツォクリン<sup>13)</sup>も1658年に改宗を余儀なくされた。

そして、このダライラマ5世とターラナータの不和の関係は、ターラナータの転生者であるジェブツンダムパにも引き継がれたとされている。例えば、1686年のハルハ部の内乱を調停するクレーンベルチルの会盟<sup>14)</sup>で、ジェブツンダムパは、ダライラマ5世の名代として参席したガンデン寺の座主(西勒圖)と席の高さを同じにしたことで、ダライラマの教えに違う者とされた。

折ト尊丹巴士謝圖汗、達達頼喇嘛之教、不尊禮西勒圖、我告之以禮法、歸好爲是、而彼反以爲非。竟興兵而來。我於此仗達頼喇嘛之靈、來毀其居。

《折ト尊丹巴(ジェブツンダムパ)と土謝圖汗(トシェート・ハーン)は、達頼喇嘛(ダライラマ)の教えに違い、西勒圖(シレート)を尊禮せず、我(ガルダン。註15を参照)は之を告ぐるに禮法を以てし、よきに歸するに是と爲す。しかも彼(ジェブツンダムパ)は反って以て非と爲す。竟に兵を興し而して來る。我はここに於いて達頼喇嘛の靈に仗りて、來して其居を毀つ。》(『聖祖仁皇帝親征平定朔漠方略』卷四、十九)

後のジュンガルと清朝の紛争へと発展していくこの出来事の背景には、ダライラマの教えに背いたとされるジェブツンダムパが要因の1つとしてあげられている<sup>15)</sup>。ジェブツンダムパがターラナータの転生者とされた「転生」認定はその根拠ともされているのである。

ところで、「ジェブツンダムパ」とは、直訳すれば「聖なる尊者」くらいの意味で、特定の人物や化身名ではない。『ジェブツンダムパ伝』には、トシェート・ハーンの息子が出家戒を授けられた際、ハルハ部の使者がダライラマ5世とパンチェンラマに報告し、その時、以下のように「ジェブツンダムパ」として認定されたと記されている。

御年5歳で座に御付けすることにより、縁起が整った。ケドゥブ・サンゲ・イエーシェーの生まれ変わりであるウェンサ・トゥルクが出家の

戒師をなさり、御名ロサン・テンペー・ゲルツェン（ジェブツダムパのチベット名）と御付けし、マハーカーラの許可灌頂も献じた。

それから、勝者父子（ダライラマ、パンチェンラマ）に御報告すると、ジェブツンダムパ（rje btsun dam pa）の化身という認定を賜った。

（『ジェブツンダムパ伝』64a1-3）

清実録にも、1647年から度々「澤ト尊丹巴」の名が見受けられることから、当時からトシェート・ハーンの息子は「ジェブツンダムパ」として知られていたものと思われる。ただ、それが何の僧の転生者であるかは明確ではなく、そこにジェブツンダムパの「転生」認定に関する議論の生じる要因がある。

## 2. 「ジャムヤン・トゥルク」とジャムヤン・チュージェー

以上のように、『ジェブツンダムパ伝』には、チベットのラサに派遣されたハルハ部の使者が、ダライラマ5世とパンチェンラマに対してトシェート・ハーンの息子が出家戒を授けられたことを報告した際、そのトシェート・ハーンの息子が「ジェブツンダムパ」として認定されたと記されている。ただ、石濱裕美子氏は、チベット語の史料において、トシェート・ハーンの息子がチベットでは「ジャムヤン・トゥルク」と呼ばれていたことを指摘している（石濱1995）。

『ダライラマ5世伝』には、1642年の正月に、ハルハ部の使者がダライラマ5世のもとを訪れたことが記されている。おそらくハルハ部の使者はラサの近郊でテントを張ってダライラマ5世を招いたものと思われる。そしてこの時、ダライラマ5世はそのハルハ部の使者に対して以下のような約束をした。

とくにハルハのドルジェ・ゲルポ（rdo rje rgyal po = トシェート・ハーン）の使者は、木部を白梅檀によって作った素晴らしい緞子製のテントを北に向けて張っていた。〔ダライラマ5世は〕そこに呼ばれ、もてなしと献品を受け、モンゴルに来て戴きたいとの報告を受けた。（『ダライ

ラマ 5 世伝』 ca,105b3-4)

〔ダライラマ 5 世は〕 デプン寺の密教行者ニェル・グンナン・チュージェーをジャムヤン・トゥルク (jam dbyangs sprul sku) の指導僧 (yongs 'dzin) として送る約束 [を伝え]、(中略) ジャムヤン・トゥルクに韻文の手紙を出した。(『ダライラマ 5 世伝』 ca,113a2-4)

以下は、共通する「指導僧の派遣」に関する『ジェブツンダムパ伝』の記述である。下のソナム・タクパは、上のニェル・グンナン・チュージェーが後に名の名であり、よって両者は同一人物であると考えられる<sup>17)</sup>。

デプン寺の密教僧であり、『カダム宝冊』 (bka' gdams glegs bam) にも預言されている師ソナム・タクパが〔ジェブツンダムパの〕指導僧 (yongs 'dzin) として招かれた。(『ジェブツンダムパ伝』 64a1-3)

史料に記されている「文殊の化身」を意味する「ジャムヤン・トゥルク」とは、時期、ハルハ部の使者、指導僧等の共通点から、ジェブツンダムパのことを指しているものと思われる。『ダライラマ 5 世伝』には、固有名詞としての「ジェブツンダムパ」は見受けられないので、おそらくダライラマ 5 世は、後にジェブツンダムパと呼ばれるトシェート・ハーンの息子を、この時は「ジャムヤン・トゥルク」と認識していたようである。

さらに、『ダライラマ 5 世伝』には、1642 年にハルハ部の使者がチベットを訪問した際、ダライラマ 5 世が「ジャムヤン・トゥルクに韻文の手紙を出した」と記されている。その時の手紙は以下のものかと思われる。

ジャムヤン・チュージェー・タシペーテンの生まれ変わりといわれる  
チヨナン派のトゥルク、クンガー・ニンポ (ターラナータのチベット名)  
の転生者が、ハルハのドルジェ・トシェート・ハーン家に生れたことを  
告げる、金剛の鼻に香しいマラヤの香り。(『ダライラマ 5 世の手紙集』  
44a)

この手紙によれば、ジャムヤン・チュージェー・タシペーテン（以下、ジャムヤン・チュージェーとする）がターラナータに転生し、さらにトシェート・ハーンの息子に転生したことになる。つまり、ダライラマ5世が認めた「ジャムヤン・トゥルク」とは、ターラナータの「前世」にあたるジャムヤン・チュージェーの転生者ともとれるのである。

ジャムヤン・チュージェーは、ゲルク派3大寺の1つであるデブン寺を創設した僧であり、ターラナータの「前世」とされている。ただ、このゲルク派の高僧ジャムヤン・チュージェーが、チョナン派のターラナータに転生したということについては、ダライラマ5世自身あまり良い印象を持っていなかったようで、これはダライラマ5世がターラナータを嫌悪するようになった原因の1つであったかと思われる。

〔ダライラマ5世曰く〕 チョナン・トゥルク（ターラナータ）は、ジャムヤン・チュージェーの生まれ変わりなのであろうか。デブン寺の方に大いなる浄相が見られるということであるが、それは物影にひっそり隠れて事をなし、狡猾にして真実を貶める者であろう。（『ダライラマ5世伝』 ca.107a1-3）

ただ、ジャムヤン・チュージェーがターラナータに転生し、さらにターラナータがジェブツンダムパに転生するという説は、ジェブツンダムパの正しい「転生」として次第に定着していくことになる。時代は下るが、『モンゴル仏教史』<sup>18)</sup>には以下のように記されている。これは現代の一般的な認識にも一致する。

さらに、ハルハの大いなる地に成就者の法輪が移された。ナクポ・チョーパと、一切智者ジャムヤン・チュージェーを内に具えた大ターラナータの最上なるトゥルク、見たところ歴史上の仏陀釈迦牟尼であり、太陽と称され、仏陀の行いを示すために現れた、ジェブツンダムパ・ロプサン・テンペー・ギェルツェン……（『モンゴル仏教史』 p262）



以上のように、「ダライラマ5世の書簡」は、ジェブツンダムパがターラナータの転生者であったことを証明しているものともいえる。ただ、石濱裕美子氏によれば、この「ダライラマの書簡」は、『ダライラマ5世伝』で言及されているような「ジャムヤン・トゥルク」宛てにはなっておらず、また日付がないことから、1642年に出されたものであるかは分らないとしている(石濱 1995)。

### 3. タクテン・プンツォクリンの改宗および修復とタシルンポ寺の存在

ダライラマ5世が認識していた「ジャムヤン・トゥルク」は、『モンゴル仏教史』にもあるように、後世に「ターラナータの転生者ジェブツンダムパ」として定着していく。そして、その定着の過程には、ターラナータの「前世」とされているジャムヤン・チュージェーが、何らかの関わりをもっている可能性があると思われる。

『ジェブツンダムパ伝』の著者であるザヤ・パンディタは、1680年の記述をもって終わる『自伝』<sup>19)</sup>の中で、ジェブツンダムパのことを「ジャムヤン・チュージェーの転生者で、北方の法と有情の利益のために望み通り良き生まれとなった、ジェブツン・ロプサン・テンペー・ギェルツェン」(『ザヤ・パンディタ自伝』328a)と記している。これは、『ジェブツンダムパ伝』で、ジェブツンダムパがパンチェンラマからターラナータの転生者として認定されたことを記す以前の記述である。

ゲルク派の高僧ジャムヤン・チュージェーが、チヨナン派のターラナータに転生したことの真偽はここでは問わないことにする。ただ、この「転生」が世間で次第に定着していったものであったとしたら、当初「ジャムヤン・トゥルク」と呼ばれていたジェブツンダムパの「前世」として、ターラナータが、ジェムヤン・チュージェーを経由して導き出されたと考えることは可能であろう。ザヤ・パンディタが1680年の『自伝』で、ジェブツンダムパをターラナータの転生者とは記さず、ジャムヤン・チュージェーの転生者と

記したのは、当時のそうせざるを得ない事情があったからなのかもしれない。

ここで問題となるのは、「ジャムヤン・トゥルク」がジャムヤン・チュージェーの転生者のことを指すか否かである。『ダライラマ5世伝』には、この両者が無関係であったことを思わせる場面がある。次の史料は、1650年、ジェブツンダムパのチベット留学期間中において、ジェブツンダムパがチベット側から迎接の礼を受けた場面を記したものである。

12月に、ハルハのトシェート・ハーンの子ジャムヤン・トゥルクと、オイラートからのドゴロン・ツェリンなどの大旅団が到着した。彼を、ジャムヤン・チュージェーの生まれ変わりとみなす (dbang du btang ba) 僧の列、馬の迎接、多くの待遇がなされた。(『ダライラマ5世伝』 ca.154a1-2)

石濱裕美子氏は、傍線部にあたるチベット語<sup>20)</sup>が「仮定的、暫定的」な意味合いとして用いられることを指摘し、ダライラマ5世が、「ジャムヤン・トゥルク」をジャムヤン・チュージェーの転生者とする人々に同調していなかったとしている(石濱1995)。「ジャムヤン・トゥルク」が何の僧の転生者を指すのか断定的ではないため、ここは判然としないところであるが、本稿は特にこの「人々がジャムヤン・トゥルクをジャムヤン・チュージェーの転生者とみなした」という点に注目したい。

「ジャムヤン・トゥルク」すなわちジェブツンダムパのチベットにおける留学期間は、1649年から1651年にかけての2年間である。この期間は、ターラナータの宗派チョナン派がゲルク派によって改宗させられる1650年と重なっている。ターラナータの寺タクテン・プンツォクリンにも改宗を目的としたゲルク派の手がおよび、この場面はタクテン・プンツォクリンがパンチェンラマの寺であるタシルンポ寺<sup>21)</sup>と同じ中央チベット西部ツァン地方に位置していたことから、『パンチェンラマ1世伝』に詳細に記されている。

以下の『パンチェンラマ1世伝』の引用からは、まずゲルク派の僧と施主であった王侯がターラナータの寺タクテン・プンツォクリンに到着し、改宗の手順かと思われる灌頂儀礼をタクテン・プンツォクリンの僧を対象に行っ

たことが読み取れる。史料中の「サン・デ・ジク・スム (gsang bde 'jigs gsum) の無上ヨーガタントラ」とは、ゲルク派が最も重んじる密教經典である<sup>22)</sup>。その灌頂が授けられたということは、ゲルク派に属する形で修行が始まったことを意味する。つまり、チョナン派の僧がゲルク派に改宗させられたことを伝えているのである。さらに、ゲルク派の僧たちは灌頂儀礼を済ませると、その足でパンチェンラマの寺であるタシルンポ寺に赴いた。そして、このチョナン派の改宗が一通り済んだ 1651 年に、ジェブツンダムパはタシルンポ寺を訪れている。

それから、王侯、施主・応供僧が、タクテン（・ブンツォクリン）に行くよう強く求められ、9月27日に出発した。(中略) 徐々にタクテンに到着し、10月3日から〔改宗に〕着手した。

サン・デ・ジク・スム (gsang bde 'jigs gsum) の無上ヨーガタントラの灌頂、マハーカーラなどの許可灌頂と多くの法行の言葉を授けた。それに、幾らかの茶布施 (mang ja) と、八百ほどの見習い僧にそれぞれ謁見のカター、緞子、薬などの布施によって満足にさせること、きめ細かくさせた。タクテンの高低すべての寺院の座主などに良き誉れの言葉を献じた。(中略)

後に、〔王侯、施主・応供僧〕 タシルンポに到着した。それから、まもなくゲルク派のチューコル (chos 'khor) 師弟とタルパ (thar pa) 師弟など段階に応じてチャクラサンヴァラ (bde mchog)、ヴァジラバイラヴァ ('jigs byed) 2つの無上ヨーガタントラの灌頂、幾つかの守護尊の許可灌頂、グヒヤサマージャ (gsang 'dus)、全智のマンダラの言葉など法の祈願を完全にさせた。

冬の法会の初め、タシルンポの僧たちに珊瑚の布施、ツァン地方の大寺院すべてにもそれと同じ茶布施を授けた。

それから、辛卯 (1651) 年の一般向けの祈願会などが盛大に行われた。

3月に、ジャムヤン・トゥルク師弟と、トシェート父子など、ハルハの旅団、多くの僧俗が〔タシルンポ寺に〕到着した。

茶布施と良き供物を献じて、〔ジャムヤン・〕 トゥルクが〔パンチェ

ンラマから] 沙弥戒を正式に受けた。さらに、[パンチェンラマが] ヴァ  
ジラバイラヴァ ('jigs byed) の無上ヨーガタントラの灌頂などを許可  
灌頂にして[ジャムヤン・トゥルクに] 献じた。(『パンチェンラマ1世伝』  
140b2-141a6)

「ジャムヤン・トゥルク」と呼ばれる僧がツァン地方のタシルンポ寺を訪  
れたと聞いて、その地方の人々の中には、ターラナータに転生したとされる  
ジャムヤン・チュージェーを連想した者もいたかもしれない。そして、周囲  
からそうみなされているうちに「ジャムヤン・トゥルク」本人にもそのよう  
な自覚が芽生えたとしたら、1658年にタクテン・プンツォクリンの修復を  
自ら願い出たことに何ら矛盾するものはない。

ジャムヤン・トゥルクが、タクテンに学堂を建てる必要を申し上げ、  
そうして宗派(チョナン派)が健在であったときのチューコルリンパ  
(chos 'khor gling pa)などを1、2年の間に完成させるための方法を授  
かることにおいて、内密に、別の一団(pan khyad)がすぐに清らかな  
法の力を建設の兆候として現れた。

庚寅(1650)年、宗派(チョナン派)は改宗となり、傍らに金が献  
じられたが、古くからの僧は変わらずに、そればかりか新しい僧なども  
彼らの理屈によって居座り続けたため、ニュタン(チベット)の地を秘書長と共に与  
え、古い僧などを他の地の末寺へと移した。タクテンにゲルク派が表裏  
一体となるよう土地を開き、石を築き、寺院の名をガンデン・プンツォ  
クリン(dga' ldan phun tshogs gling)<sup>23)</sup>に改めた。

(『ダライラマ5世伝』ca.262b6-263a2)

以上から、ダライラマ5世が認めた「ジャムヤン・トゥルク」が次第に「ジャ  
ムヤン・チュージェーの転生者」とみなされていった過程を読み取ることが  
できるかもしれない。そして、それを促した環境としてのパンチェンラマの  
寺であるタシルンポ寺の存在もここで注目しなければならないであろう。

1680年頃に、ジェブツンダムパを「ジャムヤン・チュージェーの転生者」

と記したザヤ・パンディタは、タシルンポ寺系の僧の部類に属していた<sup>24)</sup>。そもそも、本稿の最初に述べた「ジェブツンダムパはターラナータの転生者である」という通説は、パンチェンラマからの認定を根拠にしている。つまり、ジェブツンダムパの「転生」認定が、当初のダライラマ5世が認めたものと相違するなら、それは少なくともタクテン・プンツォクリンとタシルンポ寺のあるツァン地方において定まったものと考えられるのである。

## おわりに

ザヤ・パンディタ著『ジェブツンダムパ伝』によれば、トシェート・ハーンの息子が「ジェブツンダムパ」と呼ばれるようになったのは、1640年代初頭に行われたダライラマ5世とパンチェンラマの認定からである。さらに1651年、「ジェブツンダムパ」は、パンチェンラマによって「ターラナータの転生者」と認定された。ただ、『ジェブツンダムパ伝』は1702年に成立するものである。それ以前に成立した『ダライラマ5世伝』および『パンチェンラマ1世伝』の中では、ジェブツンダムパは「ジャムヤン・トゥルク」と呼ばれ、ターラナータの転生者としての記述も見当たらない。

清実録には、1647年から「澤卜尊丹巴」の名が度々登場してくる。おそらくトシェート・ハーンの息子は、「ジェブツンダムパ」としては広く知られていたものと思われる。ただ、当時は「聖なる尊者」がハルハ部に存在するくらいの認識であったかもしれない<sup>25)</sup>。チベットでは、より詳しく「ジャムヤン・トゥルク（文殊の化身）」と呼ばれていた。

ダライラマ5世が1642年に出したとされる、トシェート・ハーンの息子宛ての書簡には、ジャムヤン・チュージェーがターラナータに転生し、さらにターラナータがトシェート・ハーンの息子に転生したとある。つまり、これはトシェート・ハーンの息子でもあったジェブツンダムパが、ターラナータの転生者として認められていたことを証明しているものともいえる。ただ、この「ダライラマ5世の書簡」は、日付が記されていない点などから、少なくとも1642年のものではなかったともいわれている。

ザヤ・パンディタは、『ジェブツンダムパ伝』成立以前に、『自伝』のなかで「ジェブツンダムパはジャムヤン・チュージェーの転生者」であることを記している。ジャムヤン・チュージェーとは、ゲルク派3大寺の1つデブン寺の創設者であり、「ダライラマ5世の書簡」にもあるように、ターラナータの「前世」ともいわれていた。おそらく、後世にジェブツンダムパがターラナータの転生者として定着していく過程には、このジャムヤン・チュージェーが何らかの関わりをもっているものと思われる。そして、ザヤ・パンディタがパンチェンラマの寺であるタシルンポ寺系の僧であったことは、以下のような推察を導いてくれる。

ジェブツンダムパのチベット留学期間は、チヨナン派改宗の年と重なっている。改宗対象のターラナータの寺タクテン・プンツォクリンは、タシルンポ寺のあるツァン地方に位置し、改宗もタシルンポ寺を拠点にして行われた可能性が考えられる。そして、改宗が一通り済んだ後、ジェブツンダムパはタシルンポ寺を訪れている。もちろん、その頃のジェブツンダムパは、チベットでは「ジャムヤン・トウルク」と呼ばれていた。

後に、ジェブツンダムパはタクテン・プンツォクリンの再建を試みる。ターラナータの寺であったタクテン・プンツォクリンを「ターラナータの転生者」が再建することは当然であったかもしれない。ただ、ターラナータの宗派であったチヨナン派は、寺の再建時はすでにゲルク派によって粛清されている。よってこの場合は、「ターラナータの転生者」としてのジェブツンダムパよりも、ターラナータの「前世」とされている「ゲルク派の高僧ジャムヤン・チュージェーの転生者」としてのジェブツンダムパと称した方が、寺の再建には差し障りがなかったのかもしれない。

ダライラマ5世が認識した「ジャムヤン・トウルク」が、何の僧の転生者のことを指していたのかは定かではない。ただ、当初の想定とは別に、共通する「ジャムヤン」の語から、「ジャムヤン・トウルク」とジャムヤン・チュージェーの混同があったことは考えられる。そして、それを促したと思われる時期と場所に、「ジャムヤン・トウルク」すなわちジェブツンダムパのチベット留学とタシルンポ訪問が一致しているのである。

こうして「ジャムヤン・チュージェーの転生者」としてのジェブツンダム

パが、タシルンポ寺のある中央チベット西部ツァン地方を中心に定着していったことは、1680年頃に成立したザヤ・パンディタの『自伝』が伝えるところである。そして、ジャムヤン・チュージェーのそれまで伝えられていた転生者であるところのターラナータが、後世においてジェブツンダムパの「前世」として定着していったのであろう。

## 註

- 1) フフホトを含む現在の中国内モンゴル自治区の中西部地域。
- 2) 師僧と檀那、寺僧と檀家。世俗の者が仏教教団を支援し僧侶が教えを施す関係。
- 3) ゲルク派デプン寺の座主であったが、徐々に政治手腕を発揮し、全チベットを統括する存在となる。「偉大な5世」と称される。
- 4) モンゴル王侯アバタイの曾孫。トシェート・ハーン＝チャグンドルジの弟ザナバザル。ハルハ随一の高僧といわれる。8代目の転生者(1869-1924、在位1912-1920)は、独立モンゴル国ボグドハーン政権の元首。
- 5) 現モンゴル国のほぼ全域にあたる。16世紀初頭にモンゴル中興の祖ダヤン・ハーン(1464-1543)が息子の一人を封じたことを起源とする。
- 6) 17世紀に現れたハルハ3ハーンの1。他、ジャサクト、チェチェンの2ハーン。
- 7) 宮脇淳子氏は、チョナン派とサキヤ派の関係が密であったことを指摘し、ハルハ部がサキヤ派を信奉していたとする。(宮脇淳子1993)
- 8) 妙舟『蒙藏佛教史』は典拠が示されていない文献で、事実に関する確認はとれない。
- 9) ゲルク派3大寺の1。他はガンデン寺、セラ寺。ダライラマはデプン寺の僧。
- 10) 使用した史料は文献表に記載。
- 11) 中央チベット西部ツァン地方シガツェのタシルンポ寺の座主。パンチェンラマは歴代、ダライラマの空位に際して政権を担うこともあった。
- 12) サキヤ派の密教や『カーラチャクラ・タントラ』、如来蔵思想を伝える。ダライラマ政権成立以降、厳しい弾圧を受け、1650年に禁教となる。(山口2004、p259)

- 13) 中央チベット西部ツァン地方に位置する。タシルンポ寺のあるシガツェからは西へ約 110km 強。ダライラマの政権の拠点である中央チベット東部ウ地方ラサからは約 340km。(数値は地図上の計算ゆえ正確なものではない。)
- 14) クレーンベルチルの位置は、ハンガイ山脈の南面のバイダリク河の溪谷。
- 15) ジェブツンダムパをダライラマの教えに違う者としたのはゲルク派の最大の施主勢力であった西モンゴル・ジュンガルの首長ガルダン (史料は、ガルダンが 1688 年に清朝の康熙帝に宛てた手紙)。ガルダンはこれを口実にハルハを攻め、ハルハの有力者は清朝に亡命。清朝がハルハを保護したことで対立はジュンガル対清朝となった。
- 16) 『大清世祖章皇帝實録』「順治四年。諭澤卜尊丹巴胡土克圖曰。爾來書已悉覽。朕非好啟兵端。若執送騰機思、並其國來歸。及所掠巴林人畜。全數送還。謝罪則已。」～
- 17) ニェル・グンナン・チュージェーは、ジェブツンダムパのチベット留学 (1649 年) に同行し、その時、名をソナム・タクパにしたと『ダライラマ 5 世伝』にはある。(『ダライラマ 5 世伝』 ca,157a3-6)
- 18) 成立は諸説あるが、『蒙古喇嘛教史』(外務省調査部訳、生活社、1940)によれば、1819 年、甘肅ラブラン寺の僧ジクメ・ナムカがトウメト部の寺ガンデン・シェートウブリンで著したとある。
- 19) ザヤ・パンディタは 1660 年にチベットに留学し、1679 年の末にハルハ部に帰国。記録の目的は、あしかけ 20 年のチベット滞在記かと思われる。その後はジェブツンダムパと行動を共にし、『ジェブツンダムパ伝』を記すことになる。
- 20) 「dbang du btang ba」は、「falling under the power of」すなわち「～の力に屈した」という語原から「hypothetical = 仮定上の、仮想の」となる (Goldstein 『Tibetan-English Dictionary of Modern Tibetan』)。『蔵漢大辞典』では、「dbang du btang」で「认为、算是、当作。」となる。
- 21) 中央チベット西部ツァン地方のシガツェに位置する。歴代パンチェンラマが座主に就く。セラ・デプン・ガンデンと合わせてゲルク派 4 大寺院と呼ばれることもある。



- 22) ゲルク派が重んじる3大密教経典。すなわち『グヒャサマージャ ([gsang] dus) (秘密集会タントラ)』、『チャクラサンヴァラ ([bde]mchog) (勝樂タントラ)』、『ヴァジラバイラヴァ ([jigs]byed) (大威徳金剛タントラ)』の3つ ([gsum])。
- 23) ゲルク派の主要な寺には「ガンデン (dga'ldan)」の冠名がつくことが多い。「タクテン」改めガンデン・プンツォクリンは以降、ゲルク派の経典印刷所として機能。
- 24) ザヤ・パンディタの自伝には、ハルハの伝統に従ってタシルンポ寺に入ることを決意したとある(『ザヤ・パンディタ自伝』331b-332a)。
- 25) 1677年成立されるハルハの年代記『アサラクチ・ネレティン・トゥーフ』は、「qamuy-i medegči cöb-ün čay-un qoyaduyar čidayči sayin oyutu šasin-u duvača sayin čoytu-yin qubilyan-u bey-e)「(中国語訳：認一切第二勝者善智法幢善吉祥の転生)(直訳：一切智者であり、困難な時代の第二の尊者となるであろう、良き智慧の宗教の輝きによって転生した身体)と記す。(『アサラクチ・ネレティン・トゥーフ』53.v.26- 54.a.05)

## 史料・文献

『ジェブツンダムバ伝』

blo bzang 'phrin las, dza ya paNDita (1642-1708). *sh'a kya'i btsun pa blo bzang 'phrin las kyi zab pa dang rgya che ba'i dam pa'i chos kyi thob yig gsal ba'i me long*. 1702. Reproduced in the Collected Works of Jaya paNDita blo bzang 'phrin las. ŠATA-PIṬAKAĀKA SERIES, vol.281. New Delhi.

『ダライラマ5世伝』

ngag dbang blo bzang rgya mtsho, Dalai lama V (1617-1682) *za hor gyi ban+de ngag dbang blo bzang rgya mtsho'i 'di snang 'khrul ba'i rol rtsed rtogs brjod kyi tshul du bkod pa du kU la'i gos bzang las glegs bam dang po/ (rang rnam ca)*

ngag dbang blo bzang rgya mtsho; gsung 'bum/\_ngag dbang blo bzang rgya mtsho; W294, 364 ff. (pp. 1-730). sikkim research institute of

tibetology, gangtok. 1991-1995.

『パンチェンラマ 1 世伝』

blo bzang chos kyi rgyal mtshan, Panchen Lama I (1567?-1662) *The autobiography of the First Panchen Lama, blo bzang chos kyi rgyal mtshan / Ed. and reproduced by Ngawang Gelek Demo ; with an English introduction by E. Gene Smith*

Gedan sungrab minyam gyunphel series vol. 12, Delhi : Jayyed Press , 1969.

『ダライラマ 5 世書簡集』

*rgya bod hor sog gi mchog dman bar pa rnam la 'phrin yig snyan ngag tu bkod pa rab snyan rgyud mang.* ngag dbang blo bzang rgya mtsho; 1 volume; 577 columns. W27476. kunsang topgay, thimphu. 1975.

『モンゴル仏教史』

→ 「モンゴル佛教史」研究 / 大正大学総合佛教研究所モンゴル佛典研究会訳注 (1) (大正大学総合佛教研究所研究叢書、第8巻、ノンブル、2002.6.)

→ 久明柔白多傑『蒙古佛教源流』(藏文)(青海民族出版社、1993.12.)

『ザヤパンディタ自伝』

blo bzang 'phrin las, dza ya paNDita (1642-1708) . the complete works of blo bzang 'phrin las. TOME474. No.12176 (『大谷大学図書館所蔵西藏文献目録』No.12176) Kha. 1-26 (325a-350a)

『聖祖仁皇帝親征平定朔漠方略』(四庫全書 345-355、上海古籍出版社)

『大清世祖章(順治)皇帝實録』(臺北・新文豐出版、1978.7)

『アサラクチ・ネレティン・トゥーフ』

Byamsba erke daicing. Asara y ci Neretü yin teüke. 1677. 烏雲畢力格『《阿薩喇克其史》研究』(中央民族大学出版社、2009)

宮脇淳子

「ジェブツンダンパー世伝説の成立——十七世紀ハルハ・モンゴルの清朝帰属に関連して——」(『東洋学報』74巻3・4号、1993)

立川武蔵／石濱裕美子／福田洋一

『西藏仏教宗義研究 第7巻 トウカン「一切宗義」ゲルク派の章』（東洋文庫、1995）

陳慶英／金成修

「喀尔喀部哲布尊丹巴活佛轉生的起源新探」（『青海民族学院学報・社会科学版』、vol.29 no.3 2003.7.）

新藤篤史

「アバタイの「金剛 (včir)」ハーン号と 16 世紀末ハルハのチベット仏教」（『大正大学大学院研究論集』第 37 号、2013）

妙舟『蒙藏佛教史』（江蘇広陵古籍刻印社、1994）

王森『関于藏伝佛教史的十篇資料』（中国科学院民族研究所鉛印本、1985）